



## 1. 瀬戸内海の地形、及び景観について

## (1) 瀬戸内海の地形について

 瀬戸内海(多島海)の原型は、地殻変動により、紀伊水道、鳴門海峡、豊後水道、関門海峡の決壊、及び地盤の浮沈や、氷河の溶解による海面上昇などが加わって、低湿地帯は大海原となり、高地は大きな島となり、谷間は島を分断する「瀬戸」に、小高い丘や小山は、大海原に点在する小島となって出来上がったと言われています。

それに潮流や風波による造形作用が加わって浸食崖や、崖から切り離された奇岩や小島が散在する海岸線、浸食により削られた「土砂が堆積した砂浜」が交互に存在します。




 そんな島々に挟まれた狭隘な海域は「海峡」、大きな島に挟まれた川のような海域は「瀬戸」、大海原は「灘」と呼ばれます。「海峡」では潮流が巨大な渦を巻き、細長い「瀬戸」では大河が島々を取り囲む様に流れます。

瀬戸内海に浮かぶ無数の島々は、大きさも形も様々で、或る所は一直線に、或る所は無秩序に、或る海域では密に、或いは疎に・・・東西500km、南北20～50kmにわたって展開します。

その数は、“島”と名のつくものだけで 約730個、〇〇岩とか、〇〇石も含めれば、3,000とも8,000とも・・・数え切れません。ここ(船上)から見る「呉湾」は、そんな瀬戸内海の一部に過ぎませんが、しかしそんな瀬戸内海の全貌を想像する材料は揃っています。

## (2) 瀬戸内海の景観、

 瀬戸内海には、◇緑の島々に囲まれた大小“湖”のような景観、◇島々の斜面に広がる段々畑、◇沖合のギラギラ輝くさざ波をかき分けながら進む船影、◇波静かな鏡のような水面にくっきり映る「松の木の緑と白雲」のコントラスト、◇沖をゆく船舶や遠方の小島が海面上にくっきり浮かび上がる「浮島現象」・・・等々。それに◇朝日や夕日が輝き、四季折々の風物が一体化してバラエティに富む景観が各所に形成されます。



呉湾周辺の島々、とびしま海道・しまなみ海道・・・等々は、何れも「芸予諸島」に属し、比較的大きな島々が密集しています。従って、島々の狭間は運河が糸を引く様に連なり、かつては村上水軍の活躍場になっていました。しかし現在は壮大な架橋で結ばれ、一層迫力のある現代版の「瀬戸内風景」に変貌しています。

そんな島と島の狭間は、渦巻く流れを喘ぎながら進む上り船と、それを嘲笑う様に走り去る下り船が、分刻みで出会う場所になっています。因みに音戸の瀬戸は、四六時中「約1.5分毎に1隻の船舶」が航行する過密航路になっています。



瀬戸内観光の醍醐味は、そんな次々移り変わる景色を眺めながらくつろぎの時間を過ごすクルージングと、高台(展望台)からの眺望は「大規模箱庭」というか、

多島美の立体模型が楽しめます。 呉近辺の眺望ポイントには； 灰が峰、休み山、野呂山・・・等々があります。

### (3) 瀬戸内海の”製塩業” (竹原・三つ子島)

🌟江戸時代の海上交通網は、日本海側(北前船)を手始めに、太平洋や九州周り航路も着々と整備され、生活資材はもとより、人も情報も、全国あまねく行き交いました。

その中で瀬戸内沿岸の代表的産物としては、”塩”が送り出されていました。 勿論、”塩”は人の生命維持には究めて貴重な産物です。 大規模な「製塩法」は、江戸時代以降、広大な砂浜に潮の干満差を利用して海水を引き入れ天日乾燥する【入浜式製塩法】が、赤穂藩で開発され瀬戸内全般に広まったのですが、それは昭和時代に入っても戦後まで続いていました。

🌟しかしそれは大変な労力が必要で、世界の交易システムが整うと、手っ取り早い『岩塩輸入』にシフトしました。 そして化学技術が進歩し、プラスチック原料などに需要が急増した昭和 30 年代に、塩田は完全に姿を消しました。

現在は、専らメキシコからの『岩塩輸入』に頼っており、日本中の需要の 90%以上は、呉湾内の三つ子島から再配送されているそうです。 しかし(従来 100% だった)食用は僅か数%に過ぎず、殆どは塩化ビニルなどのプラスチックや、洗剤、ゴム、ガラス、ソーダ工業など工業製品の原料になっています。 しかし塩田オーナーやその有力者たちは、相当な地位を得ていた様です。 呉近辺では竹原には超豪華屋敷が建ち並び、「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。

### (4) 「日本歴史」の中の呉周辺風景

🌟ところで自然景観の絶景スポットは、瀬戸内海に限らず日本中には無数存在しています。 しかし瀬戸内(呉近辺)の風景は、日本歴史と深く関わっているのが特徴で、そんな歴史跡や街並みをセットで見学すれば、もっと興味深い発見があります。

島々を包む様に流れる潮流は、かつて風まかせ潮まかせの航行船舶にとって大変な難所で、水軍氏族にとっては、水先案内など絶好の活動場になっていました。

しかし時代が江戸時代に移り、社会が安定化すると、日本海側の食料や生活物資を人口密集地の京都や大阪に運ぶ北前船の経路となり、大量の物資と共に人や日本中の情報・文化を流通させ、百花繚乱の庶民文化を開花させました。

🌟しかし明治時代になると急速に機帆船、鉄道など陸上交通露、電信・電話などが出現し、北前船は次第に役割を終えました。

しかしそれと引き替えに、呉周辺は急速に軍事色が濃くなってきました。 そして海軍鎮守府が設置されると、早くも数年後には日清戦争が勃発し、その10年後にはまた日露戦争も勃発しました。 それに何れも勝利すると、呉海軍工廠の艦船建造が軌道にのり、呉湾に浮かぶ艦船数は日増しに増加し、呉軍港は「東洋一の軍港」に成長し、やがて世界一の戦艦”大和”をも建造し、太平洋戦争終結まで日本海軍の最重要基地になっていました。



🌟そして培われた軍事技術は、「世界大戦」という未曾有の悲劇と引替え、戦後しっかり活かされ、呉市一帯は重工業地帯に発展しました。

また、瀬戸内沿岸の、(当時)燃料廠跡は巨大コンビナートに転身し、不夜城となって夜の海を照らし、その周りは無数の工場が取巻く大工業地帯となり、日本は世界第二位の経済大国に上がりました。そして現在、瀬戸内海の狭い海峡や水路は、超大型船もひしめく「超過密航路」になっています。



## 2. 日本海軍、呉鎮守府の歴史関連

### (1) 日本海軍設置について

🌟江戸時代の長い眠りから、いきなり開国を迫られ目覚めた日本にとって、見えた世界は、それまで考えたこともない先進科学技術、政治経済、教育文化形態など…と共に「欧米各国は全て「仮想敵国」という世界の実態だった。



🌟そんな中で、列強国と向き合うには、◆欧米諸国の「最新文明や産業基盤を輸入」し、◆「洋式海軍も創設」し、《先進国の体》を整えることが急務になった。

そして;

- ①「**財源と労働力確保**」は、朝鮮半島に進出し、協力関係《日朝修好条規》(1874)を締結し徴用工などを徴募し、
- ②「**海軍創設**」には、速やかに(横須賀、呉、佐世保、舞鶴)の4ヵ所に海軍鎮守府設置を計画し開庁に漕ぎつけ、
- ③ 鉄道やダム建設、富岡製糸場など産業基盤の整備、艦船建造施設など、日本国のあらゆる産業近代化と共に、軍事力増強は急ピッチで進んだ。

🌟ここに、鎮守府とは、日本周辺海域を4分割し、各海区に『兵員養成、軍港、海軍工廠(艦船の建造、修理、兵器の製造等を行う工場)、及び海軍病院、海軍水道などの機関や施設を設け、運営や監督を行う《海軍本拠地》』である。

具体的な設置場所は、敵艦の侵入を阻む地形や、艦艇の航行・停泊の便、水深、交通、物資調達、兵員募集など諸条件の最も適する港(軍港)として、①横須賀は「横須賀造船所」を引継ぎ、②呉と、③佐世保が明治19年(1886)に、④舞鶴は少し遅れて明治22年(1889)に設置が決った。

### (2) 日清戦争(1894~95)勃発と 呉軍港の功績について

🌟こうして「海軍創設 ⇒ 整備拡充」に着手すると、それに合わせる様に「日清間」の雲行きが怪しくなった。つまり、当時の朝鮮半島は、「清国」の従属国だったので、日本の「朝鮮侵出」に対し、清国軍は、日本第一の巡洋艦(「浪速・高千穂」)の2倍もある新鋭艦「定遠・鎮遠」を旗艦とする艦隊を日本各地に回航して威圧してきた。

しかし**呉鎮守府**「参謀長」だった東郷平八郎もそれを視察し、「甲板が不潔で、主砲に兵員の洗濯物が干してある…」など、士卒の精神が緊張を欠いていることを見抜いていた。

その直後、東郷は巡洋艦「浪速」の艦長に就任(1891)した。

🌟それから3年後、遂に「日清戦争」が勃発した。**呉軍港**や、**広島**(陸軍)から大勢の兵士が出征して凄まじい肉弾戦が戦わされ、負傷兵は呉海軍病院で治療された。

しかし戦場は朝鮮半島や遼東半島だったので「戦争の凄惨さや残酷さ」は、大本營の検閲を通して日本国内には如何に伝わっていたらう?

しかし日清戦争は、**東郷艦長**の巡洋艦「浪速」などの活躍により日本軍は勝利し、朝鮮半島と台湾と共に多額の賠償金も獲得する大収穫を得た。

それは、呉鎮守府開庁から僅か数年後の大功だが、朝鮮からは大勢の徴用工を徴募し、欧米からは大量の資材を輸入し、インフラ工事や軍事施設や、あらゆる産業基盤の強化にも弾みがついた。

### (3) 東郷平八郎

#### ◆イギリス留学(1871-78)

★東郷平八郎は、薩摩藩士として幕末の戦闘で悲惨さを嫌と言うほど経験し、軍人の志しはなかった様だが、英国に留学して人生が変わった。

英国では、英語、数学、理科など基礎を学んだ後、入学した商船学校は、船が校舎であり、宿舎だった。船上での実践授業では「学術優秀、品行方正、礼儀正しい」という彼の評価だった様だが、卒業後、世界一周航海について。マストに上り、風の強さや方向、天気の変化や波の変化を即座に予測して操船する技術と併せて、商船と雖も「戦い」に対する国際法や愛国心も学んだ。

#### ◆呉鎮守府に在任中 =「北洋艦隊(清国軍)の来航」=

★東郷は帰国して 10 年余り後、「**呉鎮守府参謀長**」に就任(1890/ 5~1891/12)した。

その間、日本の朝鮮侵出に対し、「日清戦争」の前兆と見るべきか(?)清国軍「北洋艦隊」は、威嚇の為、自慢の新鋭艦「定遠」(7,430 トン)を旗艦とし「鎮遠」など 6 隻の艦隊を日本各地に回航させた。

そして横浜沖に停泊中、「定遠」に皇族や大臣、陸海軍将校、新聞記者等を招いてレセプションを催し、招待客は、日本第一の巡洋艦「高千穂」(3,650 トン)や「浪速」の2倍もの偉大さに圧倒された。



北洋艦隊の旗艦「定遠」

★艦隊は、更に**宮島沖**にも停泊し、呉鎮守府首脳等を招いて艦上レセプションが開かれた。

しかし東郷参謀長は、甲板が不潔で整理整頓が不備で、自慢の26cm主砲には洗濯物を干しているなど、「軍艦は強大堅固でも、乗務人員の訓練も実戦能力も未熟で、海軍将校も指揮官の間も不統一で、近代国家の軍隊とは云えない」状態を見抜いていた。

東郷は、**東郷邸(離れ)**では、恐らくそんな来るべき日清戦争の作戦などを巡らしていたのではないだろうか? その直後、防護巡洋艦「浪速」の艦長に就任(1891)した。




呉; 東郷邸(離れ)



防護巡洋艦「浪速」


## ◆東郷平八郎と日清戦争

★ そうして、遂に「日清戦争」が勃発すると、「吉野」、「高千穂」、「秋津洲」、「浪速」(＝東郷艦長)の艦隊(＝何れも高速艦)が編成され、清国「北洋艦隊」に、高速速射砲(高速で近づき速射砲を連発する)で戦争勝利に導き、東郷の能力が国内外に知られる様になった。

その前後、東郷は次の職を歴任している。

- ◇(1890-91) 吳鎮守府参謀長
- ◇(1891-) 巡洋艦「浪速」艦長;→(1894—95) 日清戦争(豊島沖、黄海、威海衛海戦)
- ◇(1899—1900) 佐世保鎮守府司令長官
- ◇(1901—1903) 舞鶴鎮守府司令長官
- ◇(1903) 連合艦隊司令長官→(1904—05) 日露戦争(日本海海戦)


## ◆肉じゃが<論争>

★ 東郷平八郎は、イギリス留学中(1870～78)に食べたビーフシチューが非常に気に入り、帰国後に艦上食として作らせ様とした。しかし日本の料理人にレシピが伝わらず、醤油と砂糖を使ってできたのが「肉じゃが」だという(実情は定かでない)。

それから約 100 年後、舞鶴市は、東郷が初代「舞鶴鎮守府司令長官」だった(1901)のを根拠に、『肉じゃが発祥地』と宣言(1995 年)して町おこしを計った。

すると、**呉市**も、東郷は帰国後「呉」に在任した(1890)のは、舞鶴より 10 年も前だから、『肉じゃが発祥』は、“呉”の方が早い…と、論争(1998)に挑んだ、と言うより双方の宣伝効果を高め合う為の論争か? 因みに佐世保では、戦後、米海軍基地が設置され、音楽や食、ファッションなどアメリカ文化がもたらされた。その一つ、「ハンバーガー(“佐世保バーガー”)伝来の地」と宣言している。

## (4)日清戦争勝利へ 呉軍港の功績

★ こうして(呉・佐世保)鎮守府開庁から僅か数年後、待っていたかの様に、日清戦争が勃発した。つまり、当時、朝鮮半島は、《清国》に支配される従属国だったので、日本の侵出は「日・清間の抗争」を招き、「日清戦争(1894～95)」が勃発した。


戦争には呉軍港や、広島(陸軍)からも大勢の兵士が出征し、朝鮮や遼東半島では、凄まじい肉弾戦が戦わされ負傷兵は呉海軍病院で治療された。

しかし「その凄惨さや残酷さ」は、内地国民に伝えられただろうか?? 正岡子規は、従軍記者として派遣されたが、現地に到着した時は、戦争が終結し、2日の滞在で帰国した。その際、松山～広島間を行き来し、船中から呉軍港の模様を俳句に詠んでいる。

★ しかし戦争は、巡洋艦「浪速」(艦長＝東郷平八郎)などの活躍により勝利し、東郷の能力は国内外に知られる様になった。

こうして朝鮮半島や台湾と共に多額の賠償金も獲得する大収穫となり、朝鮮から大勢の徴用工を徴募し、欧米からは大量の資材を輸入し、インフラ工事や軍事施設、産業基盤強化に弾みがついた。

## (5)日露戦争勃発と 呉軍港の功績

★ しかし東郷平八郎を、もっと**世界の英雄**にした「日本海海戦」は、その 10 年後に勃発した。

つまり日清戦争に勝利して朝鮮半島を支配すると、目の前の遼東半島(旅順)には、ロシア軍が先入りして堅牢な要塞を築いていた。それは折角手に入れた朝鮮半島に侵略の布石に他ならない。

しかし強国ロシアとの戦争には勝ち目がない。その脅威は「国家存亡の危機」と云う認識になっていた

が、海軍大臣 山本権兵衛は、東郷の資質を買い「連合艦隊司令長官」に任命した。



日本海海戦

日本政府は戦争回避方針で、「日露間折衝」が続けられていたが、結局、決裂し日露戦争勃発となった。

つまり肅々と朝鮮半島に侵攻を目指す「**強国ロシア軍**」と、絶対に引けない「**弱国日本軍**」の正面衝突(日露戦争)となった。

結果、決戦最後の山場;「日本海海戦」を、東郷平八郎(連合艦隊指令長官)、加藤友三郎、広瀬武夫、秋山真之ら、**呉鎮守府**ゆかりの将校たちの活躍で奇跡的勝利した。

🚩それには、英国(日英同盟)の協力があったこと、海軍

工廠が整備され、艦船の補強や修理がスムーズにできたこと、遠路回航のバルチック艦隊を発見し、対戦する気象条件に恵まれたなど、「偶々、幸運が重なったから勝てた」と東郷平八郎は述懐していた...

しかし、若し敗れるか、若しくはバルチック艦隊を(発見できず)ウラジオストック艦隊と合流していれば、現在の日本も、ロシアも、世界情勢も、どうなっているだろう？

## (6)加藤友三郎

🚩ところで、日清戦争、日露戦争の劇的勝利、及びその後の歴史は、東郷平八郎と並んで、加藤友三郎の功績も挙げなければならない。

### ◆加藤友三郎の主な軍功

年代	出来事	功 績
1894-95	日清戦争	巡洋艦「吉野」の砲術長として「定遠」「鎮遠」を相手に活躍
1904-05	日露戦争 (日本海海戦)	東郷平八郎(連合艦隊司令長官)、加藤友三郎(参謀長)、秋山真之(参謀)らは敵弾雨霰する「三笠」艦橋で兵士を鼓舞
1909-		<b>呉鎮守府司令長官</b>
1913		寺内・原・高橋 3代内閣で <b>海軍大臣</b> に留任した
1921	<b>ワシントン軍縮会議</b>	<b>日本全権代表</b> として派遣
1922-23		<b>内閣総理大臣</b> (海軍大臣兼務)
加藤没後の戦況	1928 張作霖爆殺事件、1931 満州事変、1933 国際連盟脱退、1937 日中戦争、1941 日米開戦(太平洋戦争)	

### ◆加藤友三郎とワシントン軍縮会議(1921)

🚩第一次世界大戦後、アメリカは、主要海軍国の建艦競争を懸念して、特に「好戦的」という悪印象の高い日本に水をさす軍縮案 =「五五三艦隊案」が提唱された。それには海軍の代表的人物だった加藤友三郎が日本全権代表として臨み、積極的に賛成した。それについて「加藤は、次の様に述べている。

国防は軍人の専有物にあらず。戦争もまた軍人にてなし得べきものにあらず。米国と戦争になれば、戦費は、10数年前の日露戦争の比ではない、しかも外債に依じてくれる国は、米国以外に見当たらない。結論として日米戦争は不可能だ。**国力に応じた武力を備え、外交手段により戦争を避けることが国防の本義なり**と信ず。

## ◆内閣総理大臣に就任(1922)

🌟 当時の日本は、国際連盟設立にも消極的で好戦的と云う悪評を払拭した加藤は「アドミラルステイツマン」と崇められた。

そして翌年、広島県出身者として「初」の内閣総理大臣に就任した。しかし僅か1年で病没した。

その後、加藤の本意は如何に処遇されただろう・・・？ 結果として日本は、上表(下部)の如く、数年後には「張作霖爆殺事件」、10年後には「満州事変」、10数年後には「日中戦争」、そして20年後には、遂に「米開戦」と、次々、加藤が危惧した通りの道を選択した。



## (7) 満州事変～日中戦争

🌟 日露戦争に勝利した日本軍は、敗残兵を追って「満州」に侵入した。そこは豊富な地下資源や、広大な農業生産用地、都市開発用地・・・等々が揃っており、【日本】には願ってもない「宝の山」だった。しかし満州は、元々清国(後の中国)領土で、満州住民の他、清国人やロシア人も住んでいた。勢いに乗る日本軍(関東軍)は、そんな「**満州の占領**」を目指した。

🌟 ところがそれは、満州全土で「反日・抗日の嵐」を巻き起こし、嫌日事件が絶えなかった。そこで関東軍(石原莞爾)は鉄道線路爆破事件を自作自演した(柳条湖事件=1931)。

つまり、南満州鉄道の線路を故意に爆破して、間髪入れず『満州人の犯行❗』と断定し、満州全土攻撃を実行した(満州事変)。それは極めて短期間に「満州全土占領」を成し遂げる驚異的大成功を収め、続けて傀儡国家「満州国」樹立に漕ぎつけた。

しかしそれは「反日・抗日の嵐」は、以前にも増して中国本土まで拡大し、(中国内の)居留邦人を守る為には、関東軍は片時も攻勢を弛められなくなった。

🌟 そんな緊張状態の中で「盧溝橋事件」が偶発した。それには、石原莞爾は、保有兵力の状況を考え、「大東亜共栄圏構想」(日・中・朝・満・蒙)の「五族協和」(=**戦争不拡大**)を主張した。

しかし東条英機らの主張;「**中国全土を殲滅すべし(=暴支膺懲論)**」に押し切られ、内地からも陸軍師団や、呉鎮守府などからも「陸戦隊」が編成され、上海事変を皮切りに、中国全土攻略(日中戦争)に拡大した。

それに対し中国(蒋介石)政府は、「日本の違法侵略」を世界に訴え、米英は中国に武器支援した為、(日本は)局地戦に幾ら勝利しても疲弊が嵩み、世界からも非難される泥沼状態に陥った。

## (8) 呉界隈の賑わい

🌟 こうして関東軍は、中国本土に侵攻している間も、満州には着々と超近代的な「理想国家建設」を進めていた。

満州鉄道や農地開拓などのインフラ建設や、奉天・新京・大連などの超近代的な都市建設、及び商工業や農産業充実、金融、教育、警察・・・等々各種制度も着々と整え、日本



新京；大同大街（康徳会館）



奉天；大和ホテル

内地から大勢の満蒙開拓団移民も受入れていた。それは、内地の土建業者や商工業者(呉関係では千福酒造や土建関連業者など)も参加し、大いに潤っていた。

✚ 特に、呉鎮守府は海軍の中心的役割を担っていたので、電気、ガス、水道、市電などはいち早く開通し、盛り場にはモダンな喫茶店やレストラン、ビリヤード、料亭や朝日遊楽街、花街、映画館などが建ち並び・・・、艦隊の出入港などでそんな情報もいち早くもたらされただろう・・・、「満州国」の祝賀ムードで沸きに沸いていた。

昭和10年(1935)開催の「国防と産業大博覧会」は2カ月足らずの入場者70万人という盛況だった。その勢いは、更に世界最大戦艦「大和」建造へと引継がれていった。

## (9)太平洋戦争へのレール

✚ しかし日中戦争は、米英の参加で益々泥沼化し、しかしこの期に及んで、外交には満州や中国戦線や南方から撤退、(つまり満州国も返還せざるを得ないこと)が条件で、到底受け入れられなかった。

しかしアメリカから(日本への)石油も禁輸制裁が課せられると、それを東南アジアに求めて、東南アジア～南太平洋諸国に侵出(南方作戦)を拡大した。

そんな状況下で、厳しい財政から大枚をはたいて“戦艦大和”建造計画が俎上した。しかし時は「飛行機の時代」になっており、山本五十六らは激しく中止を訴えたが、大きな歯車は計画通り進んだ。

✚ しかしこれまでの戦場は、全て朝鮮半島や中国大陸であり、「戦争の凄惨さや残酷さ」は、厳しい検閲を通して内地国民には、如何に伝えられていたであろう? 日清、日露、満州事変、日中戦争と・・・、大本営発表、「連戦連勝の報」と共に、大量の“糧”を持ち帰る軍隊を、全国民は絶賛していた。

こうして南方侵出も、戦艦大和建造も、日独伊三国同盟も、日ソ中立条約締結も、着々と準備が整い、陸軍将校や国民世論も「鬼畜米英」を合言葉に、対米戦争に向け戦意は熟していた。しかし;

- |   |
|---|
| <p>★ 若し、“大和”の建造を断念したとすれば、真珠湾攻撃は先送りできたかも・・・(?),<br/>しかし、対米戦争を回避できただろうか?</p> <p>★ 若し、戦艦“大和”の建造を断念していたら、戦後の日本や呉はどうなっただろうか?</p> |
|---|

“大和”建造により培った「新技術開発や貴重な経験」が、戦後に引継がれたから呉は重工業都市として発展し、日本は世界第二位の経済大国に躍進できた。

## (10)太平洋戦争突入

### ◆太平洋戦争突入

✚ こうして遂に(1941/12/8)、参加艦隊との無線信号;『ニイタカヤマノボレ』、『トラトラトラ』の送受信と共に、柱島泊地には、連日艦船や輸送船団が堂々の雄姿見せて太平洋戦線に向かった。

しかし約半年後、ミッドウェー海戦(1942-6)の大敗を境に戦況は悪化の一路を辿った。

ミッドウェー作戦は、米豪の係を遮断し、あわよくばハワイの太平洋艦隊に壊滅的損害を与えて早期講和に導く・・・そんな予見から連合艦隊山本五十六司令長官が強硬に主張した。それは綿密に計画され、日本海軍の最精鋭空母と最強艦隊を投入して奇襲攻撃の筈だったが・・・、

所がアメリカ軍は、飛行機を補足するレーダーが実用化し、日本軍の暗号も解読して待ち伏せしていた。連合艦隊はその包囲網に突っ込み、最精鋭空母「赤城、加賀、蒼龍、飛龍」=4隻と共に、多数の航空機や、優秀なパイロットも失う惨敗に終わった。

その後日本軍は成す術もなく、太平洋の島々は遠方から順に陥落・玉砕していった。



## ◆柱島泊地

✧その翌年(1943/6/8)、**柱島泊地**には、「大和」や「長門」など、太平洋戦線に向かう艦船や輸送船団が雄姿を見せて集結していた。所が、停泊中の戦艦『陸奥』が、突然謎の爆発事故を起して沈没した。『陸奥』は、「大和」建造まで我が国最大級の戦艦で、爆沈により乗員 1,100 人余りが犠牲になった。当時【爆沈事実隠ぺい】の為、乗組員(生存者=353 人)は本土上陸が許されず、離島に隔離されて次の出征地(多くはアッツ島)で玉砕したと聞いている。



1971(昭和 46 年)までに『陸奥』の艦体は一部が引き上げられ、菊の御紋章や主砲などが陸奥記念館(周防大島)に保存されている。兵士の遺品は、当時の情景を思いながら見ていると何か異様な感慨に引き込まれる。

## ◆出征兵士たち

✧**江田島**には海軍兵学校があり、**呉**には海兵団や陸戦隊も編成された。呉軍港からは日清、日露戦争から太平洋戦争終結まで、大勢の兵士たちが、現自衛隊集会所で家族と面会し戦地に出征した。

それは陸軍も、**広島**に鎮台(後に第 5 師団)が置かれており、**呉・宇品(広島)港**からは、日清、日露、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と、大勢の陸海軍兵士が出征していった。

それも太平洋戦争初期までは、戦時色と言うより、凱旋帰還の艦船などで呉界限は沸いていた。しかし戦争末期、本土空襲が始まり、食糧不足、学童疎開等々…、戦況悪化の顕在化と並行して、万歳三唱に「武運長久」を託して送り、送られる兵士姿が常態化した。**江田島**(現海上自衛隊術科学校)には、海軍兵学校を繰上げ卒業して神風特攻機に搭乗する大勢の少年兵の遺書が遺されている。明日は命を失う若者の遺書に胸が詰まされる。

## ◆戦況悪化 ~ 日本本土空襲

✧太平洋戦線は、ミッドウェー海戦の大敗を境に、「ガダルカナル ⇒ソロモン ⇒マリアナ サイパン ⇒レイテ ⇒沖縄」と、遠方の島々から順に陥落し、玉砕が相継いだ。そしてサイパンまで陥落すると、敵機による本土空襲が本格化した(1944 年末頃~)。

戦況悪化は、極度の金属不足に日用品雑貨まであらゆる金属が回収され、コンクリート船も出現(1944)した。この頃、憲兵の取締りは益々厳しく、市民も学童も、食料不足と栄養失調と空腹に悩まされながら、防空訓練や勤労奉仕などに忙殺されていた。

そんな折、**呉湾や周辺海域**には 消沈ムードをかき消す様に “大和”など 健全な艦船団が勢揃いした。人々はそれを雄壮と見たか? 悲壮と見たか?…、燃料不足で出撃できない戦艦群の帰還だった。その中から “大和”は最後の期待を背負って、沖縄戦に向け特攻出撃した(1945/3)

✧沖縄戦に続き、本土空襲が本格化すると、連日、100機編隊の爆撃機が、1 波、2 波、…と来襲し、東京、大阪、名古屋など…主要 200 都市以上が完膚なく焼き尽された。呉市街も跡形なく焼かれ海軍工場は一部を遺して爆破された。**呉湾**に勢揃いしていた戦艦群も 1 隻残らず、沈座する臥体と化した。

空襲は親にも子にも容赦なく、家族や身寄りを奪い、酷い食糧難の中で身寄りのない幼子たちは路頭や駅構内に寝泊りし、捨てられた残飯や食べカスをあさり、その後どう生き残っただろう?…。

## (11) 呉鎮守府開庁と呉軍港の軌跡

✧(当時)人口 1 万人足らずの半農半漁の町は、干拓が進み、豊漁・豊作を祈る祭事があちこちで

催され、町の平穩を“**亀山神社**”が威風堂々と見守っていた。

そこに日本海軍の鎮守府設置が決まると、亀山神社は移転し、軍用地に掛かる住居地は一方的移転せられ、漁場も制限され、灌漑用水も軍優先に取られ・・・、住民生活はかなり圧迫された。

しかし、のどかな町は、あちらこちらで工事の槌音が響き、広い道路が縦横に整備され、川には橋が架かり、軍用地はレンガ造りの庁舎が建ち並んで、(明治22年)「**呉鎮守府**」は開庁した。



🌈👉 その後も海軍機能上「最新・最大の重要施設」が次々設置され、「日本海軍中心基地」として君臨した。それから数年後には、日本製第1号艦 “宮古”の起工と前後して、早くも日清戦争(1894)が勃発すると、立て続けに日露戦争も(1905)勃発し、何れも劇的に勝利した。

その後も、大陸では満州事変、日中戦争と戦闘が繰り広げられ、呉軍港からは陸戦隊が次々編成され、人々に見送られながら出征する兵士姿も日常化していった。

その一方、呉界隈は、電気もガスもいち早く繋がり、広島～**呉**鉄道も、市電も開業、工事する人、海軍工廠で働く人、軍役人や兵士、その家族、商売を営む人・・・凱旋寄港する艦隊などで沸きにわいた。

🌈👉 その間も**呉海軍工廠**では戦艦や、巡洋艦、潜水艦、航空母艦などを次々建造し、更に世界最大の戦艦「大和」の建造も、“真珠湾攻撃”に備えていた。そうして太平洋戦争が始まると、**柱島海泊地**には『大和』や『長門』など夥しい数の艦船や輸送船団が雄姿を見せて戦地に向かった。



🌈👉 それも今は伝説と化し、構築物も殆どが新

しい工場群と入れ替わり・・・、それでも「アレイからす小島」には、当時のレンガ造り建物や、300mにわたる《切石組み護岸》や、魚雷や弾丸の積出し棧橋とトロッコレール、英国製クレーンなどの遺構には、そんな「日本近代化の歴史」がちりばめられている。目の前に停泊する最新護衛艦や潜水艦と見比べながら 懐古してみるのも一興である。■

